

アサマシジミ特集

工. 序論 -北陸のアサマシジミについて-

1970年代初め頃、アサマシジミの調査研究がピークに達した時代があった。当時、藤岡知夫(1971・1973)・西山保典(1971)等により、次々とアサマシジミに関する興味深い報告等が発表され、それにより日本国内中の蝶屋が“青”の“ブルー”だのといっって日本各地で調査を進め空前のブームとなったのである。

アサマシジミ研究のその後の動向は、中央月刊誌・学会誌・地方同好会誌に散見され、多くの蝶愛好家による幼虫の生態、成虫斑紋の形態など種々の観点より試み長報告文に示されている。当百万石蝶談会内では現在も静かにブルー・ブームが続いており、アサマシジミをいまさら、という感がないでもないが、一応の区切りをつける意味において、北陸におけるアサマシジミについて現在までの知見を述べてみたい。

アサマシジミ *Lycaeides subsolana* は1981年までのところ北陸三県(富山・石川・福井)のうち富山・石川両県からのみ記録されている。

石川県に於ける本種の記録は、岩間温泉付近にて1953-VII-10に1♂採集され、山本順子(1956)により発表されたものが最初である。その後中宮温泉付近からも記録され、食草も武藤明(1959)によりミヤマタニワタシ *Vicia bifolia* が報告されている。

当時の採集ポイントの本種は、折からの砂防工事や白山自然保護センター建設、白山スーパー林道建設工事等により絶滅したかの如く配布されたが、その後の我々の調査でも細々と採集され、松井正人(1978)は中宮温泉付近の食草としてナンテンハギ(タニワタシ) *Vicia unijuga* を報告した。この様に中宮温泉付近の *Vicia* 属の食草については、ミヤマタニワタシとナンテンハギが報告されているが、我々の調査では、この付近からはナンテンハギのみが確認され、ミヤマタニワタシが見出されないことから、ミヤマタニワタシと

いう報告は、ナンテンハギの誤同定ではないかと考えられる。

更に松井正人は、中ノ川(1980)、蛇谷(未発表)の上流域で、Hedysarum属のイワオウギ Hedysarum esculentumより本種の幼虫を確認し白山のアサマシジミの位置づけを考える上で、重要な問題を提起した。

富山県に於ける本種の記録は、立山温泉・黒部湖(川副昭人、若林野男1976)が富山県の記録地としてあげられているが、確実性に乏しく疑問視されている。現時点では大野豊・嵯峨井淳郎(1978)により発表された立山山麓のものが(1976-71-4、嵯峨井により採幼された)、確実な記録とされている。

その後、野中勝(1979)により早月水系の立山川から、そして本会々員による1980年の調査により、同水系の白萩川・ブナグラ谷・小又川からアサマシジミが確認された。

また嵯峨井・松井は、疑問視されていた旧立山温泉田圃(木野透 et al 1979)及び湯川・真川(いずれも常願寺川支流)を調査した結果、湯川谷ではイワオウギを食するアサマシジミを発見し、問題の立山温泉付近ではイワオウギを数株発見したにもかかわらず、アサマシジミは発見できなかった。

富山県のアサマシジミは、現在のところ立山川・白萩川・ブナグラ谷・小又川・湯川谷・祇名川のいずれもイワオウギに発生している。

最近、仁平勲(1981)により『アサマシジミの変異とその分布』と題した興味深い論文が発表され、石川・富山産のアサマシジミについても触れられているが、若干の気にかかる記述が見られるので、この機会に我々の意見を述べておきたい。

まず、石川県における本種の食草とされているミヤマタニワダシは、前述のとおりナンテンハギの誤同定であろうというのが、大多数の意見である。

もう一点、富山県においてニヶ所の新産地が発見され、一方は“トガクシタイプ”、他方は“アサマタイプ”である。云々……とあるが、我々の採集して得た早月水系・常願寺水系の標本を検査する限りでは、仁平式分類法に従った場合全てが“トガクシタイプ”であり、他にアサマタイプの産地が富山県内に存在するならば興味深

注1. 最近になって金沢市の金子ニ次氏が、我々とは独立に1977年に早月川においてアサマシジミを採集されていることを知った(未発表)。これは、我々の知る限り最も早い早月川からの記録である。

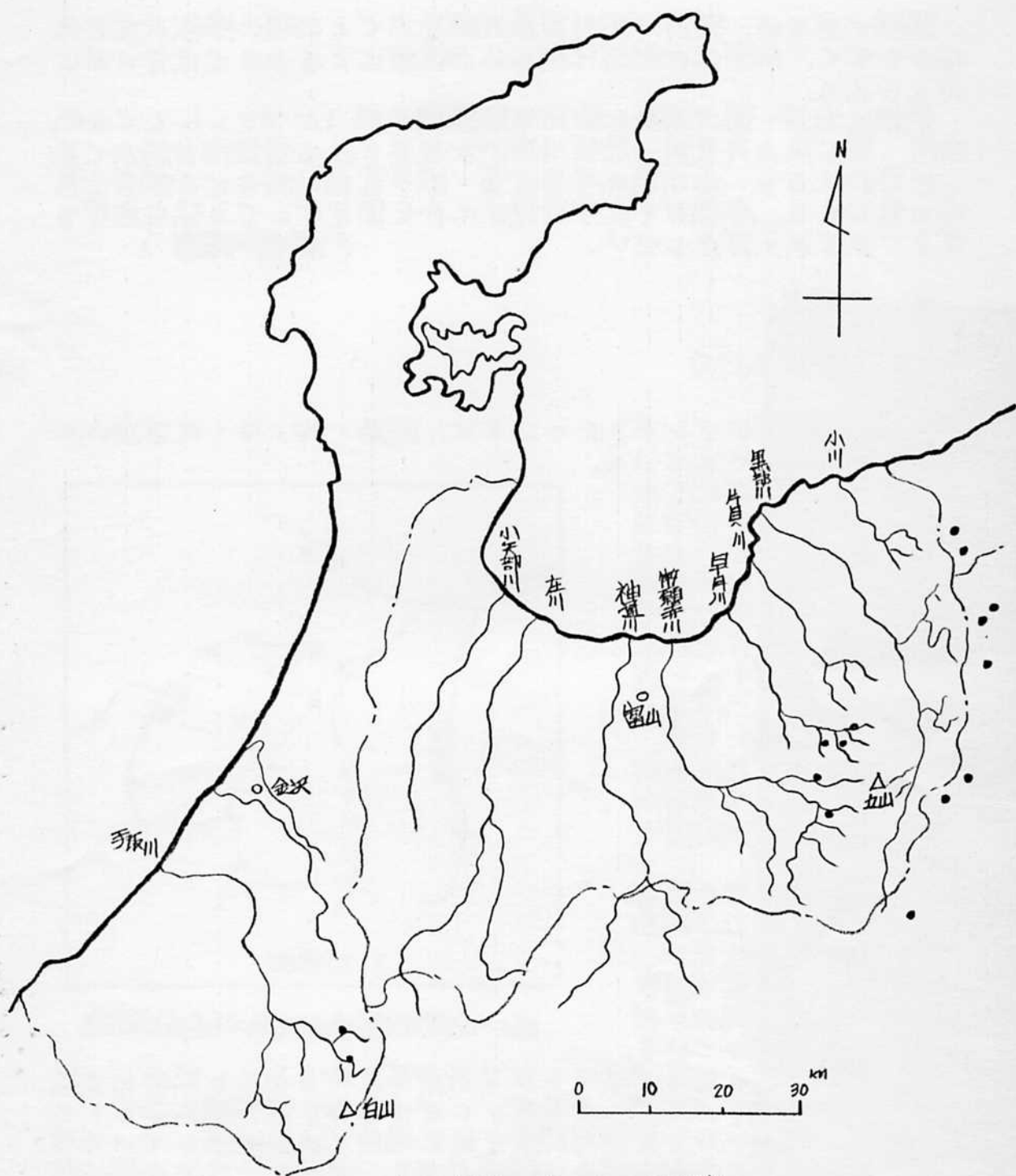


図-1. 北陸のアサミヅミの既産地

い問題であるが、富山・石川両県の蝶屋内でその種の情報が流れた様子もなく、仁平氏の記述は何らかの誤報によるものではないかと考えられる。

最後に石川・富山両県に於ける既産地を図1にプロットしてみた。今後、富山県の片貝川・黒部川等から発見される可能性は極めて高いと思われる。石川県の牛首水系・岐阜県白川村などの調査も重要と思われる。今後はそれらの地区に目を向け少しでも空白地帯を塗りつぶすよう努力したい。
(嵯峨井海郎)

五. 生息地

1. 石川県尾添水系

尾添水系のアサマシジミについては、蛇谷・中ノ川・丸石谷入口付近の調査がなされている。

図2は我々が確認した産地であり、図中の白丸印はナンテンハギ¹²の産地を、黒丸印はイワオウギ¹²の産地を表わしている。またX印は屋根上¹²のみが得られた地点であり、付近に食草らしきものは見あたらず、風に吹き上げられたものと思われる。以下食草別に生息環境・発生期等を述べる。

ナンテンハギの産地は、丸石谷と蛇谷の標高600~800m間に散在し、平坦な河原、放置された畑跡の草地、岩棚の草付等が産地となっている。

この一帯に認められるアサマシジミの食草に足りうると思われる植物はナンテンハギのみで、ナンテンハギはかなり広範囲に分布しているが、アサマシジミは毎年限定された場所でのみ発生している様子である。いずれの産地も小規模であり、アサマシジミの個体数も多くない。幼虫はいずれも食草上より得られており、早月川での

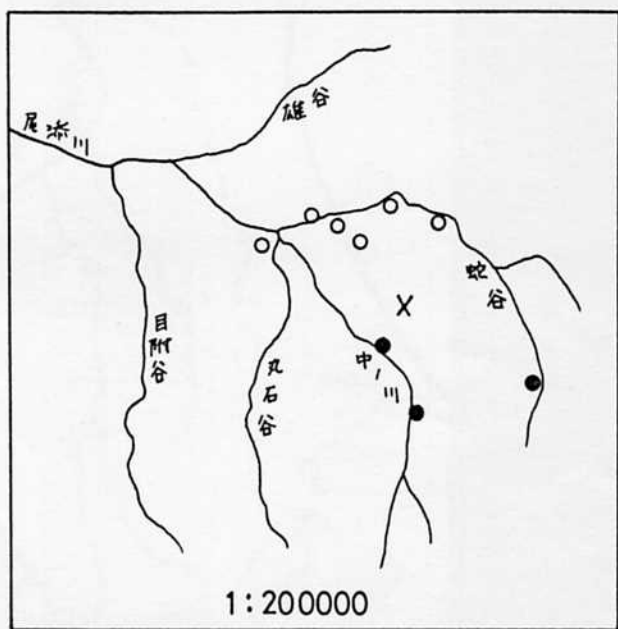


図2. 石川県尾添水系のアサマシジミ分布確認地

例の様は食草根際の下などからの採集例は聞かない。成虫の記録は6月下旬より7月下旬で、発生のピークは7月上旬頃と思われる。幼虫は早いもので5月上旬より現われ、遅いものは6月上旬にも見られる。

イワオウギ^{注3}の産地は、中ノ川と蛇谷の標高900~1100m間であり切り立った岩壁の下、カレ場、古い中洲などが発生地となっている。中ノ川の下流の産地は、イワオウギの比較的近くにナンテンハギ・タイツリオウギ *Astragalus membranaceus* が見られるが、今のところ食草としてはイワオウギのみが確認されている。

中ノ川の上流の産地は、イワオウギ・タイツリオウギが混在していて、タイツリオウギも食草となっている可能性が強い。

蛇谷の産地は、付近にはまったくイワオウギしか見られない。いずれの産地もイワオウギの分布は連続しているにもかかわらず、アサマシジミの分布は局地的であり、小規模である。成虫の発生はナンテンハギの個体群より半月程度遅れるようで、8月下旬でも新鮮な個体が得られる。(松井正人)

注2. 序論にも述べた如く、武藤明(1959)は、食草としてミヤマツツジを報告しているが、我々の観察によれば、アサマシジミの幼虫が食している *Vicia* 属の植物は、全て期に苞を宿存せず、ナンテンハギと考えられる(牧野富太郎, 1962)。アサマシジミの摂食の有無を別にしても、我々は現在までこの付近からミヤマツツジを確認していない。

注3. 藤田知夫(1981)には、イワオウギを食するアサマシジミとして、石川県石川郡若野村白山山腹産の個体が図示されている。詳しいデータが不明であるが、ここに述べる生息地との異同は明らかでない。

2. 富山県早月水系

富山県に於けるアサマシジミの記録地を図3に示す。いずれの地域も1~数回の予備調査がなされているのみで、地図中の空白部分は、非分布地というよりは、未調査地と理解していただきたい。

今後の調査で多くの新産地が発見されることが期待される。早月川では、1980年6月1日、本会会員6名による調査が行われ、立山川・白糸川・ブナグラ岩・小又川より本種を記録することができたので、その結果を中心に報告する。

立山川

立山川における採集地点は、両側が絶壁のせまる谷の底にわずかにある河原の砂利の斜面であり、標高は約1100mで日当たりが長く、

まわりは雪がかなり残っているのに、その斜面だけは雪も溶け、イワハタザオの群生する中にイワオウギが点在していた。アサマシジミの幼虫は、そのイワオウギの葉上で摂食していたり、根際で静止していたりしていた。今回の調査では3令4頭、終令4頭の幼虫が得られ、飼育の結果12884羽が羽化した。寄生されたものはなかった。またイワハタザオには、クモマツマキ4ヨウの卵も見い出された。今回採集された地点より標高の高い部分にはほとんど雪におおわれている状態であったので、もっと遅い時期に調査してみれば、イワオウギの株ももっと見い出されると思われる。

なお同地点よりやや下流の堰堤横に、エビラフシ *Vicia deflexa* が相当数発見されたがアサマシジミの幼虫は見い出されなかった。又、1981年に行なわれた調査では、堰堤付近からもイワオウギとアサマシジミの幼虫が確認された。

白萩川

1980年6月1日の調査により標高約1000mの地点でアサマシジミの分布を確認した。数株のイワオウギが谷の岩上に生えており、その一株よりアサマシジミ4頭が得られた。2令と3令幼虫で2頭はイワオウギの葉上に、2頭は根元の小石の中にいた。飼育の結果3881羽が羽化し寄生されているものはなかった。

ブナグラ岩

アサマシジミの採集されたところは、標高約950mの堰堤の下に広がる小さな河原の草地で、クモマツマキ4ヨウの卵をつけたイワ

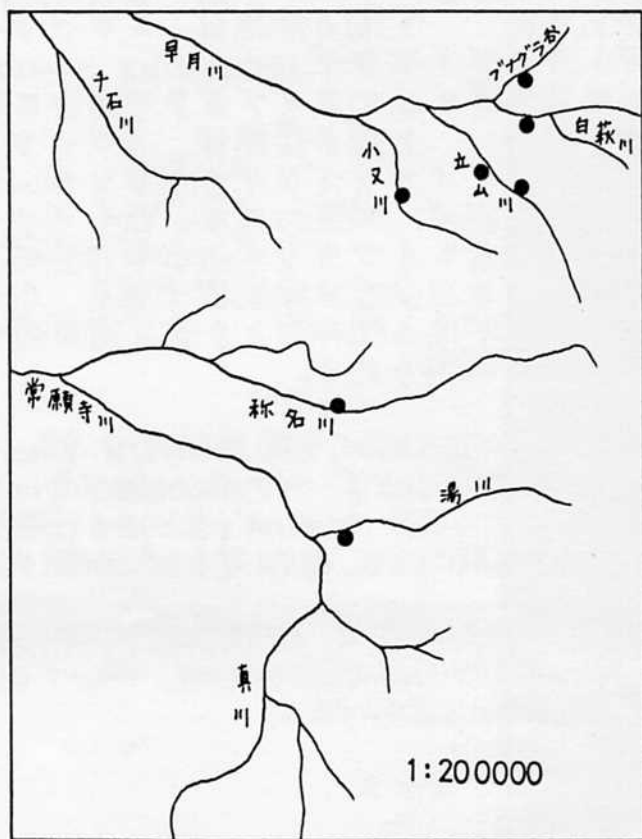


図-3 嵐山早月・常願寺木系のアサマシジミ分布確認地

ハタザオなどと共に、数十株のイワオウギが散在していた。イワオウギにはかき取りの痕が認められたが、大部分はヒメシジミによるものでアサマシジミは、同日の調査では終令幼虫が1頭得られたにすぎない。これは食草上に静止していたものであり、金TRで飼育した結果、6月15日に1令成羽化した。

なお、当日は残雪の為、堰堤より上流は調査できなかったが、アサマシジミの生息している可能性は高いと思われる。

小又川

小又川においては、同日の調査では終令幼虫が1頭、3令幼虫3頭が採集された。これらは全てイワオウギより得られた。小又川における本種の生息地は、標高900mぐらいで早月水系の他の発見地に比べ標高も低く、環境もやや異なりイワハタザオ・ミヤマハタザオはほとんどなく、ヤマガラシが群生する広い河原であった。

アサマシジミの食していたイワオウギも広い河原の石の間に自生するものであった。

しかし早月川は富山県における有数のあばれ川であることから、初夏の降雨期の増水等で川の様子が流動的であることが考えられ、我々の発見した場所で毎年発生しているとは断言しがたい。他の早月水系では、がれ場にイワオウギが常在する環境であったのにならば、広い河原のまん中に、ぽつんとあるイワオウギの株に発生していたことを考えると、近隣のがれ場やもっと上流の斜面を探索する必要がある。(吉林久貴)

3. 富山県常願寺水系

常願寺水系のアサマシジミの産地は、図3に示される如く、称名川と湯川から知られている。そのうち称名川の記録は、1976-VI-4に嵯峨井により、6頭の幼虫が得られ、大野豊・嵯峨井海部(1978)により報告されたもので、富山県に於ける本種の最も早い確実な記録である。

称名川

詳細はAmica 17(2)に詳しい。Amicaでは、産地名を立山山麓(1000m)とし、称名川の名を履して発表したが、その後、富山県の各地でアサマシジミが発見され、秘匿する必要がなくなったので、あらためて称名川に産することを公表しておきたい。発見当初、本種幼虫が食していた食草名がわからず、食草については、イワオウギであろうという表現にしてあったが、早月水系に於ける調査に参加して得

られた知見より、称名川におけるアサマシジミの食草はイワオウギであることが確認できたので記録しておく。

なお、1981年の数回の調査によりまったく別の場所よりイワオウギを発見した。(松井未発表)

湯川谷

湯川谷では、1980年6月7日の嵯峨井・松井の調査により、本種の生息が確認された。食草はすべてイワオウギである。

発生個体数はかなり多く、終令幼虫から1令幼虫まで様々のステージが見られたが、終令幼虫はかなり発生率が高かった。

発生地の環境は、岩場の急斜面でイワオウギの大株が各所に見られる。おそらく人跡未踏の状態を今後覆すことが不可能に近い岩壁に随所にイワオウギが見られることから、まず大地震でも起きて発生地が崩壊しない限り、本種の絶滅はありえないと思われる。

筆者らは、当日湯川上流の旧立山温泉および、鬼谷 周辺を、翌日は奥川を調査したが鬼谷入口付近の河原で、数株のイワオウギを見つけただけにとどまり、アサマシジミ幼虫の発見までには至らなかった。しかし筆者らが現地を調査発見した限りでは、湯川上流と下流(旧立山温泉跡を境に上流・下流と区別した)では、地質が異なるようで、この点に問題が残るが、1回限りの調査ではただの推定に過ぎず、非常識さわまりない。この点の解析は今後の研究に任せる。

なお、余談ながら当日湯川へ旧立山温泉跡周辺において、ヒメシジミ2匹、終令幼虫多数、クモマツマキチヨウ6卵(ミヤマハタザオ)を確認できたこともあわせて報告しておく。

(嵯峨井海部)

III. 形態

石川・富山両県産のアサマシジミの成虫の形態について、以下に簡単に述べてみたい。

採り得た標本数は十分でなく、又富山県産のものについては幼虫から飼育羽化させたものが大部分であることを、あらかじめのことわっておきたい。但し、野外成虫・飼育羽化の両標本を比較的多数調べることができた。石川県中宮温泉周辺産の個体を見た限りでは、飼育による顕著な形態の変化は見出せず、羽化標本による比較検討も意味のあることと思われる。図4～図7に産地別に写真を載せたが、各写真の最下段には比較の爲の長野県小治温泉産の雌雄の同一個体を図示してある。(Data 1977. VII. 18 松井正人採集) 図7のa,

eのみが野外産の個体で、他は全て幼虫から飼育したものであり、倍率は全て同じでほぼ等倍になっている。

図-4

a, b, cは尾添水系のナンテンハギ食の雄で、上から下へ青色鱗の広がる方向に並べてある。e, f, gは同雌で、赤色斑の発達度によっている。aは、例中2個体のみ認められた極めて青色鱗の発達が悪い例である。富山県産のものと比較した特長は、雄の青色鱗が灰緑色を帯びること(富山県産のものは青色味が強い)、雌の赤色斑の発達が良いことである。d, hはイワオウギ食の個体であり、ナンテンハギ食のものとの明瞭な差は認められない。(被検標本 74♂♂ 47♀♀)

図-5

早月川産の個体である。a, eは白萩川産のアサマシジミであり、b~d, f~hは立山川産の個体を図-4と同様の順に並べたものである。他に、ブナグラ谷、小又川産の個体も検したが、図示したものとの顕著な差は認められない。前述の如く、石川県産のものに比して雄は翅表の青色味が強く、雌の赤色斑の発達は悪い。hは一例のみ認められた例外的に赤斑の広がった個体で、他の雌は全てf~gの変異の巾の間に入ると思われる。(それに対して石川県産雌は、図-4のf~gの間で約50%の個体が含まれる)。(被検標本 25♂♂ 13♀♀)

図-6

常願寺水系湯川産の個体である。石川県産の個体と比較した場合の特長は、早月川産のものとの共通であるが、富山県内の3産地間で比較した場合は(図-5~図-7)、雄の青色鱗の発達が一般に悪いことで特長づけられるようである。(被検標本 39♂♂ 22♀♀)

図-7

常願寺水系称名川産の個体を図示したが、被検標本が極めて少なく、変異の巾も推測しかねる。が、一見した感じでは早月川産のものとの良く似ている様である。(被検標本 3♂♂ 2♀♀)

その他、所属する亜種の問題や、他産地の個体との比較なども重要なことと思われるが、前者は図鑑等の区分が混乱していて従うべき基準が決められなかったことにより、後者は比較すべき十分な標本が得られなかったことにより省略した。ただ本州産のアサマシジミを、トガクシーヤリがタケ系と、真性アサマ系に大きく2つに



図-4 石川県尾添水系のヤマシジミ

図-5 富山県早水水系のヤマシジミ

a. 吉野谷村蛇岩
1981.VI.28採化

e. 吉野谷村蛇岩
1981.VII.2採化

a. 上柳町白藜川
1980.VI.16採化

e. 上柳町白藜川
1980.VI.20採化

b. 吉野谷村中宮温泉
1980.VI.5採化

f. 吉野谷村中宮温泉
1977.VI.21採化

b. 上柳町立山川
1981.VII.21採化

f. 上柳町立山川
1981.VII.22採化

c. 吉野谷村蛇岩
1981.VI.24採化

g. 吉野谷村蛇岩
1981.VI.27採化

c. 上柳町立山川
1981.VII.21採化

g. 上柳町立山川
1981.VII.20採化

d. 尾口村中川
1981.VI.28採化

h. 尾口村中川
1981.VI.30採化

d. 上柳町立山川
1981.VII.19採化

h. 上柳町立山川
1980.VI.22採化

*. 長野県小治温泉産

*. 同左

*. 同左

*. 同左

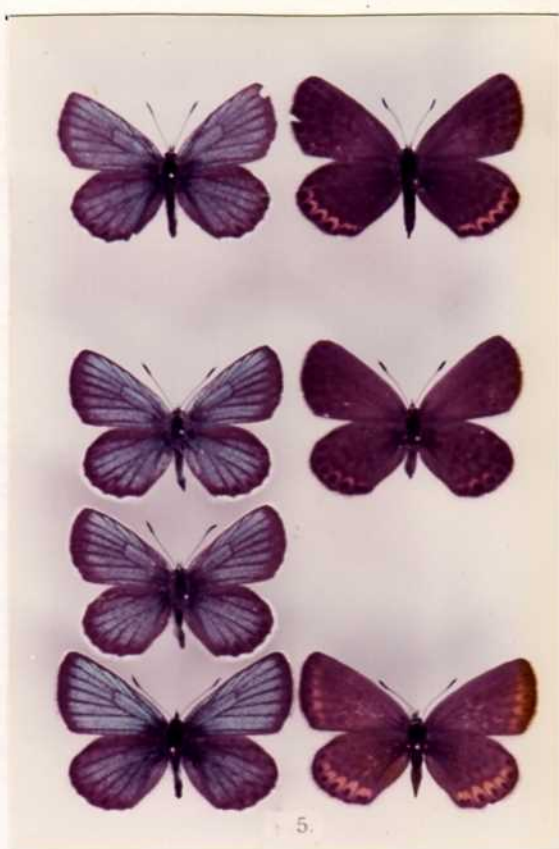
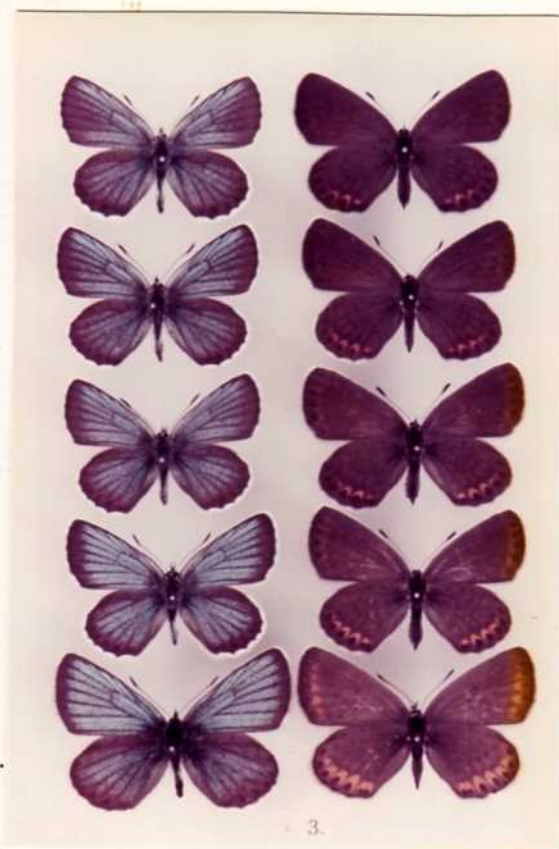


図-6 富山県常願寺水系湯川谷の
アサマンジミ

図-7 富山県常願寺水系称名川の
アサマンジミ

a. 大山町湯川谷
1980. VI. 19 羽化

e. 大山町湯川谷
1980. VI. 22 羽化

a. 立山町称名川
1976. VII. 26

e. 立山町称名川
1976. VII. 26

b. 同上

f. 同上

b. 立山町称名川
1976. VI. 20 羽化

f. 立山町称名川
1976. VI. 20 羽化

c. 同上

g. 同上

c. 立山町称名川
1976. VI. 19 羽化

* 長野県小治温泉 * 同左

d. 同上

h. 同上

* 長野県小治温泉産

* 同左

以上、標本は全て越前井澤郡、松井正人
野中勝次採集保管しているものを引用。
撮影：松井正人

分けて考えた場合には、石川・富山両県産の個体が全て前者に含まれることは、図-4~7からも明らかと思われる。最後に石川県産のアサマシジミに、アオシジミ、ハフサンシジミ等の名称を提唱しているおきもある様だが、分類学的位置づけを押し上げたまま和名(種名? 亜種名? 地方型名?)のみをつけても、何ら問題の解決にはならず、筆者は賛同しかねることを付記しておく。

(野中 勝)

IV. 要約

富山・石川両県のアサマシジミの生息地、食草、形態について、以下に簡単な一覧表を作ってみたので要約にかえる。この表が今後より充実したものになることを期待したい。

生息地			食草		形態		
			標高(m)	確認された食草	他に存在するアサマシジミの採集地の植物	雄の翅表	雌翅表の赤色斑
石川県	尾添水系	丸石浴蛇岩	600~800	ナンテンハギ		お灰緑色味が強い	お良く発達
		中ノ川	900~1100	イワタバギ	ナンテンハギ タイソウギ		
富山県	早月水系	フクダラ岩 早月川 早月川	400~1100	イワタバギ	エビラコジ	お青色味が強い	お発達が悪い
		称名川	1000	イワタバギ			
	常願寺水系	湯川	1200	イワタバギ		青色鱗の発達がやや悪い	

(野中 勝)

V. 文献

1. 大野豊・嶋根耕海郎(1978) 富山県のアサマシジミについて AMICA 17(2)
2. 川副昭人・若林守男(1976) 原色日本蝶類図鑑 保育社
3. 武藤 明(1959) 白山の蝶・数種について とくくりばち 8
4. 西山 保典(1971) グルーの謎を求めて(1.2) 月刊おし 6(11.12)
5. 仁平 勲(1981) アサマシジミの変異とその分布 昆虫と自然 16(4)
6. 野中 勝(1979) 富山県早月川でアサマシジミを採集 翔 7
7. 藤岡 知夫(1971) 日本のアサマシジミをめぐって(上・下) 昆虫と自然 7(10.11)

8. 篠岡 知夫 (1973) 蝶の紋 河出書房新社
 9. ————— (1981) 改訂増補・日本産蝶類大図鑑 講談社
 10. 牧野富太郎 (1962) 新日本植物図鑑 北隆館
 11. 松井 正人 (1978) アサマシジミについての一知見 とくりばち 41
 12. ————— (1980) イワオウギを食すアサマシジミ 翔 18
 13. 柳野透 et. al. (1979) 富山県の昆虫 富山県
 14. 山本 順子 (1956) 石川県産の蝶 113種に於る 新昆虫 9 (13)

(編集後記)

かねて懸案と持っていた北陸のアサマシジミのとりまとめを発表いたします。

いま顧みますと、先輩方の御尽力により岩間温泉にてアサマシジミが発見されて以来、はや28年を経過しています。

特に石川県のアサマシジミについては決いボールに包まれていて、昆虫界のお歴々には、何とも名状し難い苛立ち感を拭いきれなかったのではないかと推察されます。

本報告を読まれてお気づきのとおり、調査の実態はごく一部に過ぎず、北陸のアサマシジミについて”という表現は、いささか驕慢感を禁じえませんが、日本国内の昆虫界の情勢をかえりみますと、未完了ながらも、一度明暗をけりきりしておかなければならぬ時期に到来していることを痛感し、ここに発表に到った次第であります。

当然のことながら、我々会員一同は、調査未完了地域に重点をおき、アサマシジミ調査を現在も続行中であることをつけ加えておかなければならない。

本報告は、百万石蝶談会の野中勝、松井正人、嶋成井海郎、吉村久貴、諸道秀人、吉岡泉の調査協力により完成したものである。

なお、本報告を草するにあたり色々と御助言頂いた金子二久氏をはじめ多くの方々に厚く御礼申し上げます。

- 1981年7月 記す。 -

翔 № 24 —アサマシジミ特集— 1981年12月20日(日)

発行： 金沢市三日新町4-9-34・松井正人方
百万石蝶談会

編集・校正： 野中 勝・松井正人・嶋根井鴻郎・吉村久貴